

University of Adelaide

佐々木 亮樹

(新潟医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科医療福祉学専攻)

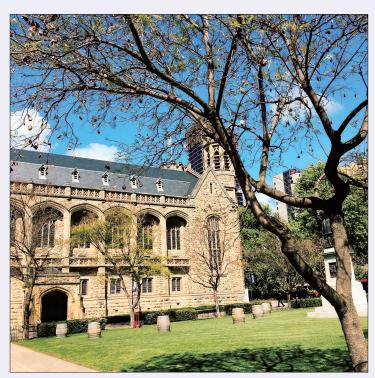
皆さん、こんにちは。2019 年 10 月より、オーストラリアにある Neurophysiology of Human Movement Laboratory に留学しております佐々木亮樹と申します。私が滞在しているアデレードはオーストラリアの南部に位置し、「世界で最も住みやすい都市」の1つに選ばれております。また、州都ながらコンパクトにまとまった都市であるとともに、山や森では野生のコアラやカンガルーを見ることができます。

私の留学しているラボでは、一次運動野の可塑性を誘導する効果的な介入手法の開発を目的とした神経生理学的研究を行っております。研究成果は、脳卒中後の運動麻痺などに対するリハビリテーションに役立てることを目指しており、本研究所の論文は Journal of Physiology や Brain Stimulation などのハイ・インパクト誌にも数多く掲載されています。私は、日本の脳外科病院で理学療法士として働きながら、大学院で研究活動を行ってきました。日本で所属していたラボでは、指導教員および周囲の先生方に恵まれ、不自由のない環境の中で研究活動を行うことができました。その中で、次第に「新しい環境で研究に挑戦したい」「海外で研究者として働きたい」という思いが芽生えてきました。そして、私の念願が叶い、現在のラボでお世話になることになりました。一方、留学に至るまでのビザ手続きや家探しなどは長い道のりでは、スムーズに進むことの方が稀でした。また、留学を経験して日本とオーストラリアの働き方や生活の違いを数多く実感しました。まず同僚や Ph.D.の学生はおおよそ 16 時になると帰宅し、年に1度は1~2か月の長期休暇を取っていました。生活面では、コンビニが少ないことやレストランの食事が高く(1 商品で 1,200~2,000円が相場)、日本が恋しくなることも多々ありました。そのため、海外留学を経験することで日本の素晴らしさを知る良い機会にもなったと思います。

オーストラリアは海外からの留学生が多いことで有名ですが、私たちのラボでは3人のオーストラリア人と台湾人、南アフリカ人、日本人が1人ずつの少数のラボでした。私は留学前に英語力を鍛えるべく、4か月間の語学留学もしておりました。しかしながら、ネイティブイングリッシュやオーストラリア訛りには非常に苦労しました。しかし、指導教員のJohn や同僚に何度も助けていただきました。また、週に1度の定期的なミーティングを開いていただき、英語でのディスカッションは非常に新鮮でした。

最後になりましたがこの度の留学に関しては、多くの方々に支えていただきました。この

ような貴重な機会を提供してくださった上原記念生命科学財団をはじめとする関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。今後は、この海外留学を生かして、脳卒中におけるリハビリテーションの発展に寄与できるように日々、精進してまいりたいと思います。



アデレード大学のキャンパス風景

オーストラリアでの留学生活を 振り返って

The Florey Institute of Neuroscience and Mental Health, Melbourne University

泉尾 直孝

(千葉大学大学院医学研究院細胞治療内科学)

私は、2019年3月から2020年1月までの約10カ月間、オーストラリアのUniversity of Melbourne 内にある The Florey Institute of Neuroscience and Mental Health に留学させていただき、Melbourne Brain Centre のセンター長であった Amy Brodtmann 准教授(以降、Amy)のもとで研究しました。長年共同で研究してきた先輩研究者が The Florey Institute に留学していた経験があり、2018年2月にその先輩が同研究所へ出張するときに帯同させて頂き、現地のいろいろな PI の先生方と面談させて頂きました。私自身は、動物実験や細胞実験を中心に認知症の病態解析を行う研究を進めていましたが、留学先では研究の視野を広げるため患者を扱う研究がしたいと考え、脳梗塞患者の MRI 画像解析やバイオマーカー探索を行っている Amy の研究室を選びました。また、新しい基礎研究技術も留学中に身につけたいと考え、The Florey Institute の近隣の La Trobe University にラボを構えていたエクソソーム研究分野のトップランナーである Andrew F Hill 教授(以降、Andy) との共同研究を Amy に提案し、エクソソーム技術を用いた患者バイオマーカーの探索をテーマとしました。

実際に留学生活が始まると、覚悟はしていましたが職場環境・生活環境には全く日本人はおらず、特に最初の1カ月は何よりも言葉の不自由による精神的負担が非常に大きかったように思います。留学準備として英会話教室に通い、ある程度の自信をもっていましたが、オーストラリア人の独特のアクセントもあり想像以上に苦労しました。留学開始から2~3カ月も経つと耳も慣れ、周囲からも理解をしてもらい、コミュニケーションに関する苦労はかなり楽になったように思います。Amy、Andyのどちらの研究室においても共通して感じたことは、研究の進め方や時間の使い方などは研究室員の自主性に任されている部分が非常に大きく、また研究における発想は自由であり色んな人とのディスカッションの中でアイデアを醸成させていく風土があることでした。学生が、自分のアイデアについて議論するために関係する人を集めて自主的にミーティングを開く姿も日常的に見られました。また特に Andyは、筋萎縮性側索硬化症患者にむけてのチャリティーマラソンに学生と一緒に毎年参加するなど、研究業績以外の方法で自分の姿勢を社会に発信しており、視野の広さを感じました。

生活面では、英語のスキルを向上させるため、AirBnBを利用したホームステイで一室を借りて生活をし、また週末は現地でできた友達と過ごすようにしました。オーストラリアはアジアを中心とした他国からの移民を多く受け入れている国であり、人々は多様な価値観が

存在することを受け入れている一方、自分からも自分のことを理解してもらう努力をしない 限り理解してもらえません。様々な人々と接し、自己表現についても学ぶ機会が多くありま した。研究生活で得られたものと合わせて、自分にとっての人生の糧となっています。

最後に、今回の留学では、研究の幅だけでなく自分の価値観をも大きく広げることができました。このような機会を与えていただき、また経済的にも安定した基盤で支えていただいた、上原記念生命科学財団の皆さまに、心から厚く御礼を申し上げます。